

第19回渋谷・クロードル賞

受賞者の横顔と作品紹介

日本とフランスの文化交流と相互理解の促進を旨とし、両国の優れた研究・著作に贈られる第19回(02年度)渋谷・クロードル賞(日仏会館・毎日新聞社主催、駐日仏大使館・駐仏日本大使館・渋谷青淵記念財団顧問社後援、ルイ・ヴィトン・ジャパン株式会社協賛、日仏会館学術委員会協

力の両国受賞者がこのほど決まった。多数の応募・候補者の中から選ばれたのは日本側3人とフランス側1人。緻密な分析、ユニークな発想、芸術家的視点を備えた質の高い作品がそろった。日仏両国の受賞者の横顔と作品について紹介する。

《渋谷・クロードル賞》「近代産業育成の父」といわれた放沢栄一(1840~1931)と、駐日大使を務めた詩人・劇作家のポール・クロードル(1868~1955)は1924年、発起人となり東京に日仏会館を設立。開館60周年の84年、同会館と毎日新聞社の共催で2人の功績をたたえ、日仏の文化交流に貢献した学者・知識人を表彰する「渋谷・クロードル賞」が設けられた。

☆第19回渋谷・クロードル賞受賞者 中山洋平 戦後フランス政治の実験 第四共和制と「組織政党」(1944~1952年)(東京大学出版会) 一九四四~一九五二年 フランス第四共和制は、国土解放後の政治革新への革新と情熱を担って生まれた。議会体制の革新を固うとした第四共和制こそがその熱意を再いたしたのだから。議会連合政治と「組織政党」の党内過程の交錯を明らかにし、第四共和制の政治構造を描き出す。 A5判/七八〇〇円

知



フランス政治史上の「神話」を解体する意欲



作だ。第二次大戦前の第3共和制は、議院が主導権を握る「議院体制」を根付かせたが、安定した多数派の不在や、政党の内紛などで政府の執行力が弱く、政治的な停滞やナチスドイツへの敗北を招いたと批判された。次の第4共和制も前体制の「単なる延長」で、それを廃棄し、強力な大統領制を築いた「ドゴールこそ「救世主」とされた。



「組織政党」が、他党との連立や妥協も辞さない議会政治との間で摩擦を起し、自壊したことを膨大な資料分析で証明した。

日本側《本賞》中山洋平・東京大大学院助教授

「戦後フランス政治の実験 第四共和制と『組織政党』1944~1952年」(東京大学出版会)

1964年生まれ。東京大学法学部卒。同大学院博士課程退学。パリ第10大で研究の後、東京大学大学院助教授。 江岸時代後期の洋風画家。てきたかを個々の作家・作品と見る。19世紀から西洋美術の分析を通じて浮き彫りにした。 漢から。 味がこらうじて日本美術史研究の道を選び、留学時には早稲田大学の丹尾安典教授(近代美術史)の門をたいた。



の旗手の道を選び、留学時には早稲田大学の丹尾安典教授(近代美術史)の門をたいた。

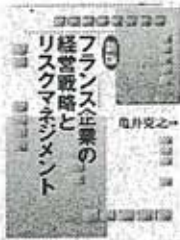
・村上隆まで。西洋と東洋の影響を受けながらも、日本現代美術が写実主義や土着性などの独自性をいかにつ

《ルイ・ヴィトン ジャパン特別賞》亀井克之・関西大助教授

「新版 フランス企業の経営戦略とリスクマネジメント」(法律文化社)



リスクを恐れ、軽視し、身動きがとれなくなつた日本に元気を与える作品だ。日産を傘下にカルロス・ゴーン社長を派遣、赤字から業績をV字回復させたルノー。



実はルノーも失敗からはあがったことを、著者は発見する。80年代、ルノーは国際競争力がない国有企業で、ボルボとの提携交渉の際、仏政府が前面に出過ぎて失敗した。だがルノーは失敗に学びリスクを恐れなかった。大胆な経営合理化、独自の開発で業績を回復。日産と、互いに尊重・補完しあうパートナーになった。戦略創出が得意な仏、実行力・品質管理に優れた日本。日仏が融合した経営は、米国流と異なる方法を生み出すと見る。

1966年生まれ。大阪外国語大卒。エクスマルセイユ第3大経営学研究所に留学後、関西大助教授。 企業不祥事だ。著者は仏企業が、事故や犯罪だけでなく、不祥事や環境汚染にまで守備範囲を広げたリスクマネジャーに高い地位と権限を与えていることを紹介。リスクマネジャーが企業の意思決定に参画すべきとする経営戦略型リスクマネジメント論を展開する。リスクマネジメントは決してもうからないが、マイナスを抑えて結果的に企業戦略を支えること話す。危機をチャンスに変えた。なぜ日本にできないのか。そのヒントが本書には詰まっている。

- フランス政治の「神話」解体…中山氏 ●ルノーに見るリスク管理術…亀井氏 ●環境保護とグルメの塩…コバヤシ氏



- 日本現代美術の独自性…リュケン氏

《現代フランス・エッセー賞(フランス大使館・特別賞)》美術家・コリン・コバヤシ氏

「ゲランドの塩物語—未来の生態系のために—」(岩波書店)



仏西部アルプス入りの江に、広大な塩田が広がる。太陽と風が海水の濃度を上げ、大粒の塩を産出するように結晶させる。それがゲランドの塩だ。塩は二つの顔を持つ。一方、塩田は地球環境保護運動の拠点でもある。意外な結び付きを発見したのが受賞作だ。実は塩田は塩職人の環境保護運動で守られてきた。周辺は60年代にリゾート開発が進み、塩田も危機にさらされた。塩職人は組合を結成、学生運動の協力も得て闘争に立ち上がる。その粘り強さで塩田は保存され、学生も定着した。しかし99年、近海でタンカーの重油が流出、収獲断念に追い込まれた。「環境を守らないと塩田が成り立たない」。塩職人は「観光客に湿地帯保護を訴え、製塩のため森林伐採しているアフリカ・ベニンへの塩田技術援助も始めた。



今夏日本のテレビ取材班がゲランドを訪れた。しかしゲランドの塩だけ見せ、政治を避けた。残念です。地球を守ることは即、政治問題でもある。ゲランドではそれが一体なの……。日本人は統合して物を見る力を失っている。ビデオアートを手がける芸術家。一片の塩を風雨のこらえる手帳は審査員を「美しい」と賞賛させた。「物語を横断的に見て、つながりを発見する。この本は一つの芸術表現です」と語る。

1949年生まれ。武蔵野美術短大中退。パリで美術家として活動。市民団体・仏日NGO交流協会エコーを主宰。 現在の関心は戦後美術。戦争の記憶がどのように美術と争い活動に生かされたのか見極めたいと考えている。

フランス側《本賞》ミカエル・リュケン 国立東洋言語文化学院助教授

「20世紀の日本美術」(エルマン)

1969年生まれ。武蔵野美術短大中退。パリで美術家として活動。市民団体・仏日NGO交流協会エコーを主宰。 現在の関心は戦後美術。戦争の記憶がどのように美術と争い活動に生かされたのか見極めたいと考えている。

《選考委員》(敬称略、順不同) 日本側… 櫻田昌吉(日仏会館理事長・元日本銀行総裁)、御水昌吉(東大名誉教授、日本学士院会員)、秋山光和(東大名誉教授)、小林善彦(東大名誉教授)、鈴木治雄(昭和電工最高顧問)、斎藤明(毎日新聞社社長)、モーリス・グドロー・モンタニエ(前駐日フランス大使)、ジュール・スイリ(日仏会館フランス学長)、ジャック・スリュ(東京日仏学院院長)、シドニ・エメリー(CIC銀行駐日代表事務所相談役)、ベルナル

アンケ(在日フランス商工会議所会頭) フランス側… クリスチャン・ソテール(パリ市助役、前仏蔵相)、二宮正之(ジュネーブ大教授)、フランソワ・クリルスキー(国立衛生医学研究所教授)、ユベール・プロシエ(パリ第1大名

誉教授)、ベルナル・ローザンヌ(元日記者協会会長)、カトリーヌ・ガルニエ(国立東洋言語文化学院教授)、小倉和夫(前駐仏大使)、西澤文昭(パリ国際大学都市日本館館長)、福島良典(毎日新聞パリ支局長) 現代フランス・エッ

セー賞選考委員… 加藤周一(評論家)▽小林善彦(東大名誉教授)▽岩田誠(東京女子医大教授)▽工藤剛子(東大教授)▽小林康夫(東大教授)▽コリーヌ・カンタン(仏著作権事務所事務取締役)▽西川恵(毎日新聞専門編集委員)

交

流

東京大学出版会

〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東大構内 TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958